

2014年11月6日「神の視点と人の視点」

＜ 聖書箇所 ＞ 「使徒行伝 10章 44節～48節」

ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである。そこで、ペテロが言い出した、「この人たちがわたしたちと同じように聖霊を受けたからには、彼らに水でバプテスマを授けるのを、だれがこぼみ得ようか」。こう言って、ペテロはその人々に命じて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせた。それから、彼らはペテロに願って、なお数日のあいだ滞在してもらった。

＜ 説教抜粋 ＞ 「神の視点と人の視点」

今日の説教の題名は、「神の視点と人の視点」です。神様の視点と人の視点は、果たして同じなのか、それとも異なっているのでしょうか。「ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。」。

ここには、割礼を受けている信者という言葉が書かれています。割礼と申すのは、ユダヤ教では非常に重要な儀式です。ユダヤ教では、割礼を施されていることがユダヤ教徒としての証でもあります。一方、聖霊がくだったとされる人たちは、ユダヤ教徒ではありませんでした。つまり、ユダヤ人にとっては異邦人であります。

この聖書箇所には、ユダヤ人たちが、異邦人に聖霊がくだったことを驚いている様子が書かれています。裏を返せば、ユダヤ人たちは、異邦人たちに聖霊がおられるはずがない、と考えていたようです。ペテロの時代には一つの前提がありました。それは何かといいますと、まずユダヤ人が洗礼を受けるべきであり、異邦人は、その救いの版図から、とりあえず外れているという考えでした。

しかし、今日の聖句の出来事は、その前提を覆すものでした。しかも、そのきっかけは神様から与えられたというのです。当事者となった人はコルネリオでした。彼は、一つの隊を任されたローマの軍人でした。しかし彼は、異邦人でしたが、聖書によれば、信仰深い人物であったようです。コルネリオがカイザリアに滞在中、彼は神様から啓示を受けました。

そして、コルネリオは、ヨッパの皮なめしシモンの家に滞在しているペテロのところへ人

を送りました。ところが、コルネリオの手下がペテロを訪れる前、ペテロにも神様からの啓示がありました。ですから、ペテロは、急な訪問者であるコルネリオの手下を快く迎え入れます。

そして、手下たちとともに、ペテロはコルネリオを訪れることとなります。ペテロがコルネリオにイエスの教えを述べたところ、コルネリオも洗礼を受けたいと言いました。ところが、当時はまだ、異邦人に洗礼を授けた前例がありません。結局、ペテロは自分が見た幻を根拠として、コルネリオに洗礼を授ることとなります。すると驚いたことに、このコルネリオに聖霊がくだり、異言を喋り始めたのです。

この出来事は、ペテロ一行にとっても、大きな驚きでありました。さて、そもそも、異邦人は神の祝福を得られない立場にあったのでしょうか。それとも、本来は異邦人にも神の祝福が与えられるべきなのでしょうか。確か救いはイスラエルからはじまります。

しかし、その救いは、イスラエルの民に留まるべきものではありません。むしろイスラエル民族を起点とし、全ての異邦人たちまでも、救いが広がっていかねばならないのです。そして、救いの中心的な立場に立っているのが、他ならぬイスラエル民族だったのです。

ところが、残念ながら当時のイスラエル民族は、そのことを理解することができていませんでした。実際は、パウロによる宣教によって、異邦人への救いが実現してゆきます。さて、ここで明らかになることは、神様の視点と人間の視点が異なっているということです。

それは、当時のイスラエル民族だけの問題ではありません。神様が見つめる観点と、私たちが見つめる観点が同一ならば、それは素晴らしいことです。しかし、それが食い違っているとすれば、私たちは、神様が何を尊重しているかということを探し求めることが必要です。